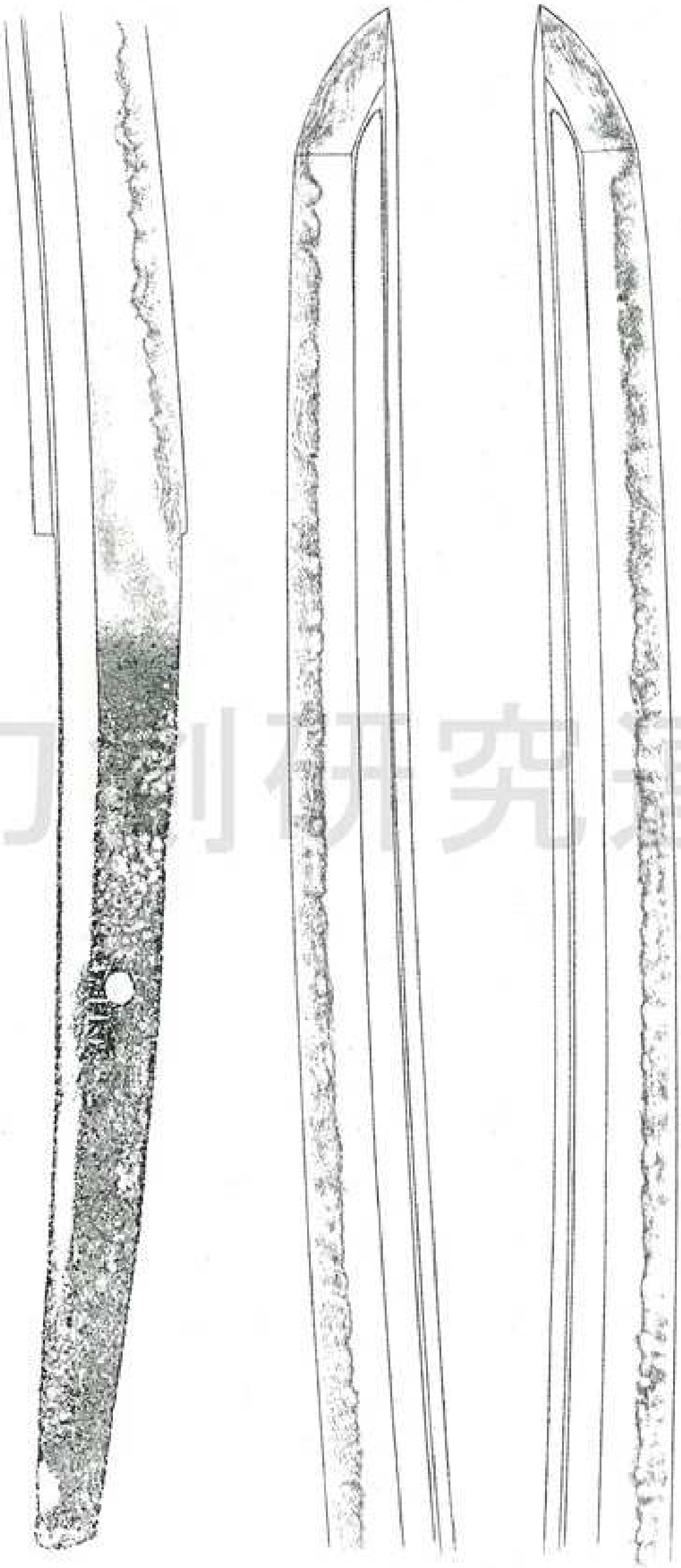
平成二十七年十月十日　第十二回大会　鑑賞刀

大刀　包平

刀長 78.8cm（二尺六寸）　反り 3.03cm（一寸）　元巾 3.00cm（2.90cm）　先巾 2.03cm（1.90cm）　元重 0.66cm（0.71cm）　先重 0.46cm（0.46cm）
茎長 21.9cm（7.2寸）　茎反り 0.2cm　茎元巾 2.02cm　茎先巾 1.36cm　茎元重 0.72cm（0.75cm）　茎先重 0.36cm（0.31cm）　切先長 3.2cm

鍛造：殆ど練低く、鎬地は狭めで鎬高は寛平（鎬わは野菜で身巾は広く内反の強かな造込みとなり、先巾も広く切先は中切先でフクラはやや張り、猪首風である。反りは腰反り高く踏張りがつき、刀長の延びに堂々とした太刀姿となる。　地鉄は板目に杢目、ごく肌立ちかげんに微塵の地沸が厚くつき、肌に添って細くあるいは太い地景がよく交じり、武人味りごころがあり、反出し映りが表われる。　刃文：腰出しから中程までは丁字に小丁字・小互の目を交じえ、その上はやや広直刃調に丁字が交じる。刃中は足・葉さかんに入り、金筋・砂流ししきりにかかり、刃肌が立って激しく変化に富む。匂口は締りかげんに明るく、きらめく沸がよくついて力強い。　帽子は乱れて金筋交じり、先は大りかげんに掃けて返る。地は深く明るい。　彫刻：表裏に深い棒樋を掻流す。

茎は生ぶ、肉は少なく鎬筋の立たない古式の茎は丸で、やや猫股になり、刃方を少し張らせかげんに先を細め、茎尻は刃上り栗尻、刃角 ||| 棟 角小角 [||| 鎬目は不明、目釘穴は一、銘は佩表の中程、目釘穴の横に太鼓で二字銘を切る。銘は左半分が鞘口を接いだ時点で削られている。同作中最指の出来の良さで、極めて保存状態が良い。秋田佐竹家伝来、銘の半分が削られているのは、将軍家よりの献上の命から逃れるためともいわれている。



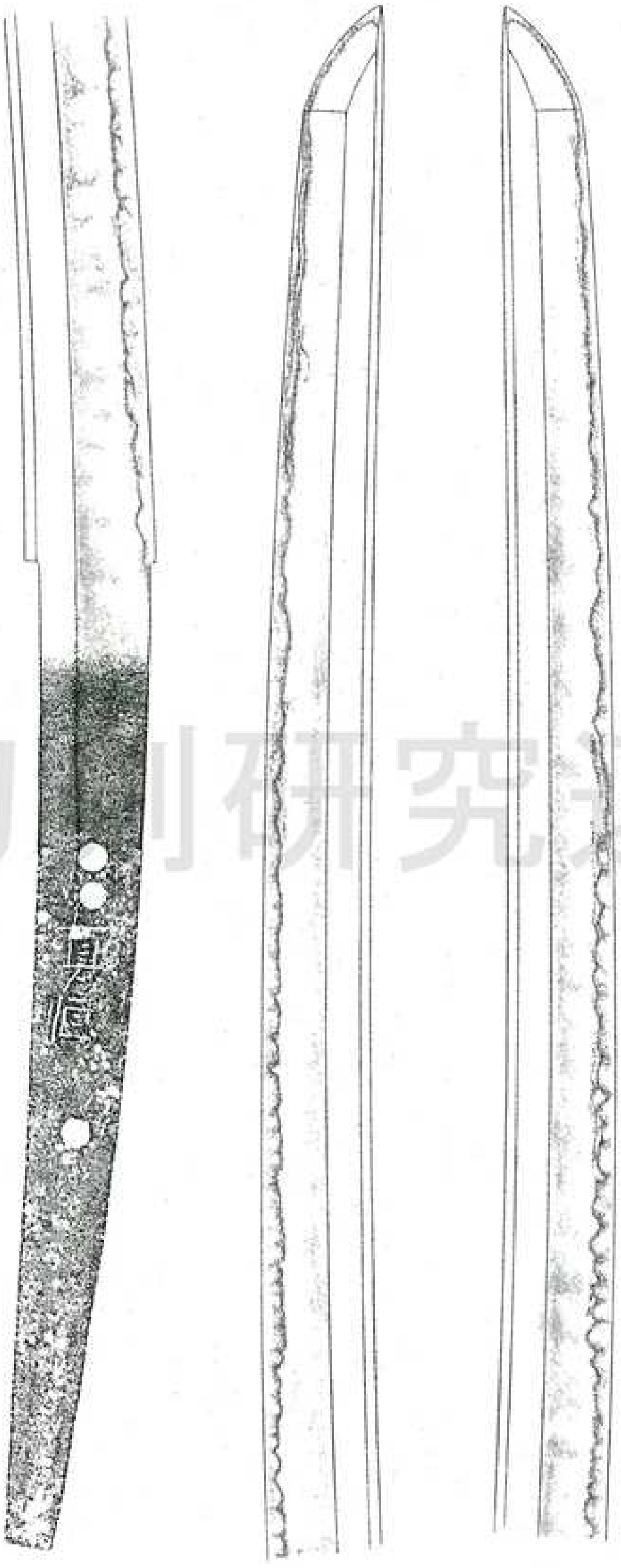
刀剣研究連合会

太刀 真恒　重要美術品　昭和十三年九月五日 認定　第十三回大会 鑑賞刀　平成三七年十月十日

刃長 71.6cm（二尺三寸五分六厘）　反り 2.7cm（七分三厘）　元巾 2.63cm（2.63cm）　元重 0.51cm（0.46cm）　先巾 1.81cm（1.51cm）　先重 0.34cm（0.30cm）　切先長 2.50cm
茎長 21.4cm（21.5cm）　茎巾 2.37cm　茎重 0.45cm（0.44cm）　茎尻 0.4cm（0.4cm）

鍛造、庵棟低く鎬中は狭く鎬高は薄く、身巾の細い造込みとなり、切先は小切先でフクラは薄く、腰反り高くやや強く、地鉄は小板目に小杢と柾目を交じえてやや肌立ち、微塵の地沸が厚くつき細かな地景がよく交じり、乱れ映りが幽玄に表われる。
刃文は小乱れに小丸子と小互の目を交じえ、直刃調に浅く湧いて途中にやや高低があり、帆表の物打下辺りから横手にかけては肌にかぶり、表の物打辺りは湯くぶれて長く二重刃になり、手元は急峻がなじむ。刃中は足・葉よく入り、匂は深くやや沈みがちとなる。
帽子は直ぐに先は小丸で短かく返る。　茎はおよそ5cm程区を送り、棟と刃の一部に元来の状態が残っている。錆色のあまり立たない古風な仕立てとなり、
茎尻は切。刃 角 目釘穴 棟 両 [illegible]

元来の刃は角・棟は角小肉で鎬目は不明、銘は目釘穴は勝手下り、目釘穴は三、銘は
茎時の書風で二字銘を鎬筋にかぶせて切る。地・刃の出来は見事で、作柄は古雅、細身で腰反り高く先で打伏せとなった太刀姿は優美。



刀剣研究連合会

刀　無銘　伝義弘　重要美術品　昭和十三年五月十日　認定　第十二回大会　鑑賞刀　平成二十七年十一月七日

刃長 69.9cm（二尺三寸〇分六厘）　反り 2.24cm（七分四厘）　元重 0.71cm（0.57cm）　先重 0.43cm（0.34cm）　元巾 2.78cm（2.67cm）　先巾 2.00cm（1.91cm）　切先長 3.26cm

茎長 16.7cm（17.1cm）　茎反り わずか　茎元重 0.74cm（0.60cm）　茎先重 0.53cm（0.42cm）　茎元巾 2.59cm　茎先巾 1.76cm

鎬造、庵棟寸尋、鎬巾は狭く鎬高は寸尋、重ねと身巾の寸尋な造込みとなり、先の身巾は頃合い、切先は中切先でフクラは張れ、反りは中間反りにやや先反りのついた大磨上げの姿となる。

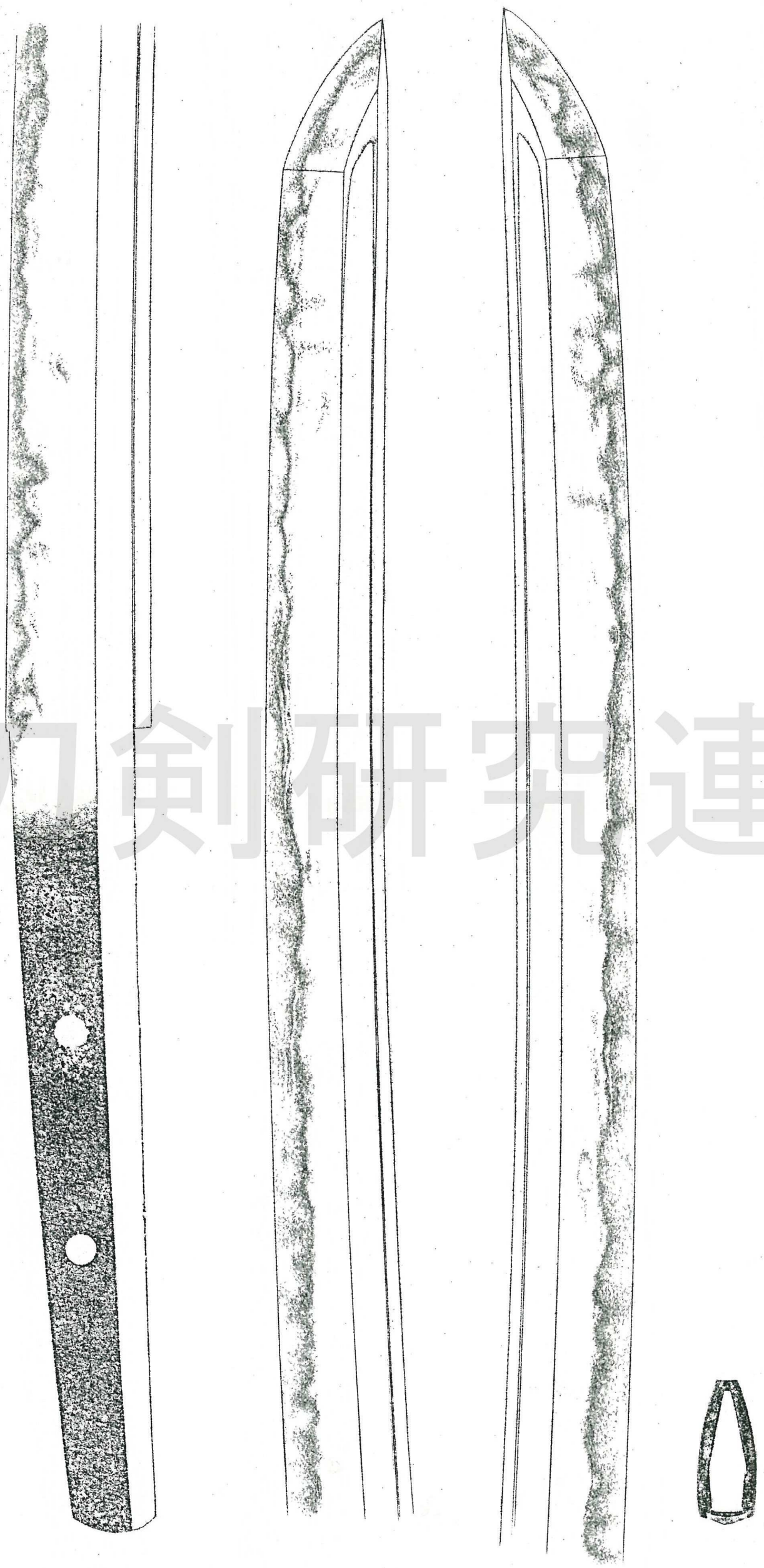
地鉄は小板目がよく約み、僅かに板目と杢目を交じえ、微塵の地沸が一面に厚くつき、細かな地景が肌に添って沈む、所々地沸がこごって湯走り（沸映り状態にも近い）があり、明るく冴える。

刃文は互の目に丁字で小丁字・小互の目を交じえ、沸が特に深く刃先まで沸え、刃中は沸足が長く激しく入り、金筋・砂流しが交じり、沸は光が強く明るく冴える。

帽子は乱れて先は尖りかげんに焼詰める。

茎は大磨上げ、肉は豊かにつき、刃方を張らせかげんに先は刃上り栗尾、刃角 ▭ 棟 角小角 ▭ 鎬目は勝手下り、目釘穴は二。

地は小板目がよく約み・地沸が細かく厚くつき、刃は輝く沸がムラなく厚くつき刃先にまで及ぶ、地・刃は明るく冴えて格調が高く、義弘ならではの最高の技倆を示している。豊前中津藩主奥平家伝来。



刀剣研究連合会

刀

備前国住長船勝光宗光　　重要美術品　　昭和二十四年五月二十八日 認定

備中於草壁作

文明十八年拾二月十三日（一四八六）

鍛造、三ツ棟、鎬は低く（棟重ねが鎬より厚い）重ねは厚く身巾の広い頑丈な造込みとなり、中切先が詰まりごころでフクラはやや枯れ、先反りを加えて腰反りがつき踏張りがある。手持ちはズシリと手ごたえがある。地鉄は小板目に板目と杢目を交じえてよく約み細かな地沸がつき、乱れ映りが深く表われる。刃文は丁字乱れで低焼きを焼き、金筋砂流し、足葉激しく入り、匂は締って明るく冴えて小沸がつく。彫刻 丸止めの棒樋を表裏に掻き、その下表は三鈷剣 裏は「摩利支尊天」。茎は生ぶ、太く短かく先は刃上り栗尻、刃角□

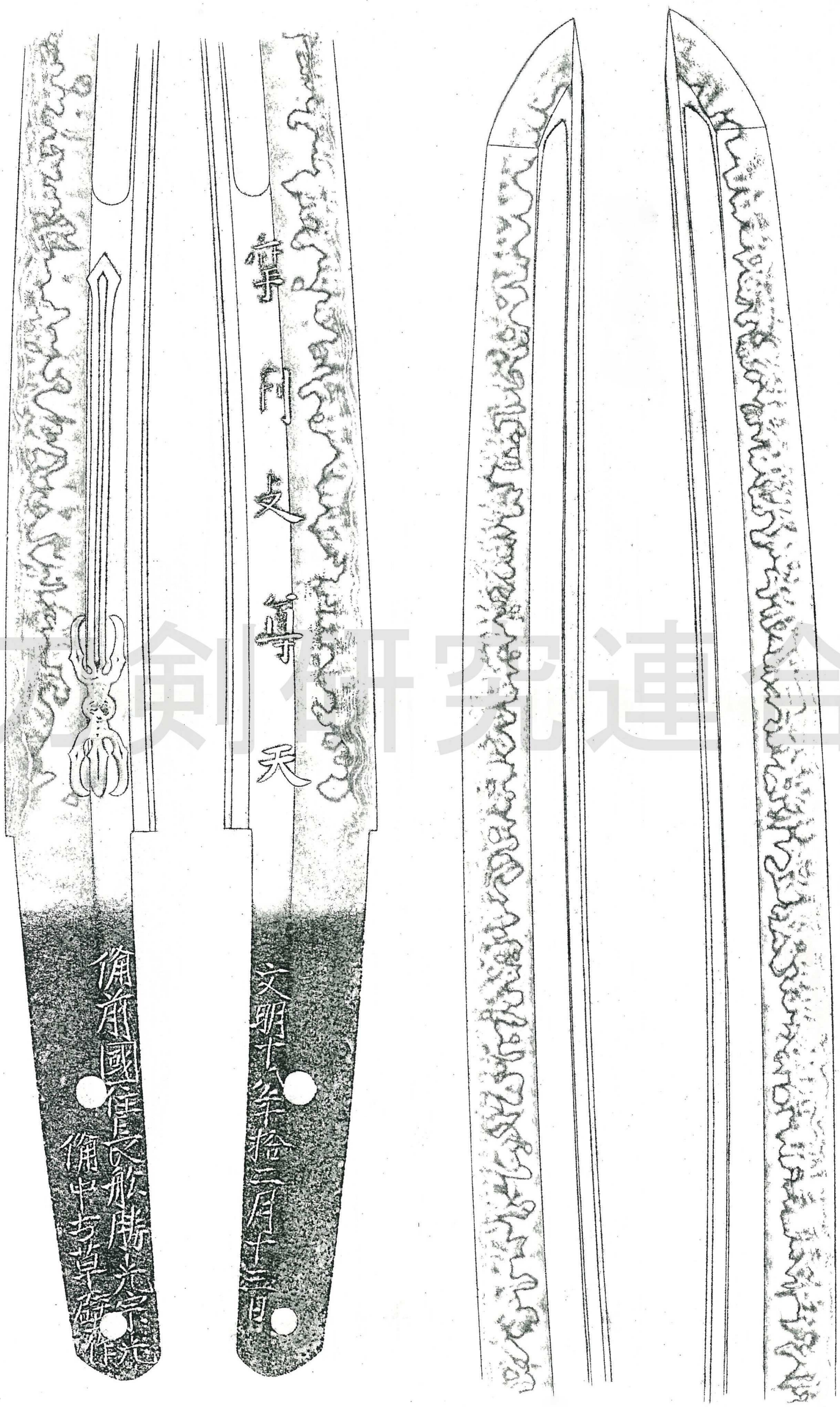
頗る健体、素晴らしい出来映えで未備前の冠刀。

第十二回大会　　鑑賞刀　　平成二十七年十月十日

刃長	63.1cm（二尺〇寸八分二厘）	反り	2.10cm（六分九厘）	元巾	3.25（3.10）
切先長	3.17cm	茎反り	わずか	先巾	2.17（2.07）
茎長	13.0（13.5）			茎元巾	2.89（2.83）
				茎先巾	2.09

元重	0.83（0.85）	先重	0.49（0.53）
茎元重	0.86（0.93）	茎先重	0.59（0.59）

棟 区際 丸 その下は角



刀剣研究連合会